

□ 書 評 □

「免疫学からみた肝臓疾患」

(臨床免疫学叢書 5)

〔編集〕 畔柳武雄・大高裕一・松橋 直

東京大学教授・内科
織 田 敏 次

「免疫学からみた肝臓疾患」を通読させていただいた。臨床免疫学叢書全10巻のうちの一巻である。

内容は11章からなり、 α -フェトブロテインと肝癌、慢性肝炎、肝硬変の免疫学的成立機序、薬剤性肝障害、肝炎の免疫抑制療法がその中心をなしている。いずれも、ごく今日的な話題であることはいうまでもない。

わが国は肝炎、肝硬変、肝癌の比較的多い国であり、それだけに、三浦、山極、長与といった先人の業績がひととき目立つ肝臓の分野であることもご承知のとおりである。しかし、この分野に免疫学が入ってきたのは、病因論をめぐってのことであり、それほど古いものではない。オーストラリアの、Burnet 門下の、Mackay が Lupoid Hepatitis の概念を提出したのが1956年である。その Mackay は Burnet との共著 "Autoimmune Diseases : Pathoge-

nesis, chemistry and therapy"(1963)をものしており、このなかに肝疾患の項がもうけられている。この際抗原としてとりあげられたのは、肝組織、ミトコンドリア、核、平滑筋組織であったが、オーストラリア抗原が発見されてからは、Almeida, Sherlock の一派、Popper の一派もいち早くこれに対象を移している。Smith and Williams の編集による "Immunology of the Liver(1970)"にもその片鱗がうかがわれる。その後さらに、液性免疫か細胞免疫か、実証は得られないまま、盛んな論議が現在も続けられているのである。

わが国でも、この問題に深い関心を示している研究者は少なくないし、それぞれその代表的な研究者によって書かれているのが、この著作であり、肝臓を場とする炎症およびその慢性化の機序にかなりつつこんだ討論が行なわれている。大いに参

考になることと思ひ、ぜひ一読をお薦めしたい。

また薬剤による肝障害も今日となってみれば、重要な関心事のひとつといわざるを得ない。実際の治療にあたって決して無視できない、というのが実状である。この点に関しても、ぜひ充分な知識をもっていていただきたい。

免疫というと、より生物学的な現象である。しかも、それ自体は元来むしろ生体にとって味方であったはずである。にもかかわらず、ひとつ間違ふと敵にまわりかねないというのであるから、はなはだ厄介である。肝臓の病気もこうした生体側の反応性を追究することによって解決するのではないだろうかというのが、この著書のすべてなのである。

A 5 頁226 図47 写真33
¥ 4,700 丁 200 医学書院刊